

## 論文の内容の要旨

論文題目 初級韓国語学習者の学習態度と学習経験による態度変容に関する実証的研究

氏名 齊藤良子

本論文は、初級韓国語学習者の学習動機、学習ビリーフ、学習ストラテジー、韓国・韓国人・韓国語のイメージについて、その特徴と、学習経験によるそれらの変化の特徴を明らかにすることを目的とした。これは、Ushioda (1996, 2001) と Dörnyei and Ottó (1998) によれば、外国語学習における動機づけは安定したものではなく、学習体験や学習段階によって変化する動的なものであるとされていることから、近年増加傾向にある韓国語学習者を理解し、より良い学習環境を提供するためには、従来の研究から明らかにされている韓国語学習者の学習態度研究に加え、学習態度の変化を総合的に明らかにする必要があると考えたためである。

本研究では学習態度を明らかにするために調査紙を用い「前期調査」「前後期調査」「変化調査」と英語学習調査を実施した。調査参加者は、調査当時、首都圏にある大学で第二外国語として初級韓国語を学んでいた学習者である。まず、前期の韓国語の授業で「前期調査」を実施したが、それと同時に、英語学習に関する調査も実施した。これは、韓国語学習と英語学習の類似点と相違点を明らかにするためのものである。動機、ビリーフ、ストラテジー調査の前期調査および英語学習調査は2010年7月に実施し、参加者は103名であった。また、韓国、韓国人、韓国語に対するイメージの前期調査は2008年6月に実施し、調査参加者は39名であった。

次に、変化を明らかにするために「後期調査」と「変化調査」を実施した。「後期調査」は「前期調査」と同じ年度の後期の韓国語の授業で「前期調査」と同じ質問紙を用いて実

施した。この前期と後期の調査結果を統計的に比較することによって、前期からの変化をみたが、この分析結果を「前後期比較」とした。また、「変化調査」では、学習者自身に変化について答えてもらい、学習者が認知している変化について調査した。動機、ビリーフ、ストラテジーの後期調査および変化調査は2011年1月に実施し、参加者は66名であった。また、韓国、韓国人、韓国語に対するイメージの変化調査は2008年12月に実施し、参加者は54名であった。

なお、初級韓国語学習者の動機、ビリーフ、ストラテジー研究では、学習者の学習態度の特徴とその変化をより明確にするために、前期調査と、後期調査および変化調査の両方に参加した調査参加者59名を分析対象の調査参加者とした。

また、動機、ビリーフ、ストラテジー研究では、成績の違いによる分析も行った。成績による分析にあたり、学習者を前期と後期の期末試験の結果をもとに、前期と後期を通して成績が上位であった上位群、前期と後期を通して成績が下位であった下位群、前期に比べて後期の成績が上がった上昇群、前期に比べて後期の成績が下がった下降群の4群に分類し、分析した。

本論文の構成は、第1章序論、第2章初級韓国語学習者の学習動機と学習経験による学習動機の変化について、第3章初級韓国語学習者のビリーフと学習経験によるビリーフの変化について、第4章初級韓国語学習者の学習ストラテジーと学習経験による変化について、第5章初級韓国語学習者の韓国、韓国人、韓国語イメージと学習経験による変化について、第6章結論である。各分野の研究方法は以下のとおりである。

第2章の学習動機研究では、Dörnyei (2005) が提唱した The L2 Motivational Self System 理論を用いて作成された Dörnyei with Taguchi (2010) の外国語学習動機の質問紙をもとに、筆者が韓国語学習者用に修正し、独自に作成した質問紙を用いて調査を実施し、その結果を16の動機づけ領域に基づいて分析し、動機の特徴とその変化を明らかにした。また、16領域の分析に加え、The L2 Motivational Self System 理論における「可能自己」の側面からも分析した。第3章の学習ビリーフ研究では、Horwitz (1987) の開発した Beliefs About Language Learning Inventory (BALLI) をもとに、独自に作成した質問紙を用いて調査を実施し、調査結果を5つの学習ビリーフ領域に基づいて、その特徴と変化について明らかにした。第4章の学習ストラテジー研究では、Oxford (1990) の開発した Strategy Inventory for Language Learning (SILL) をもとに、独自に作成した質問紙を用いて調査を実施し、その結果を6つのストラテジー領域に基づいて分析し、その特徴と変化を明らかにした。第5章の韓国、韓国人、韓国語に対するイメージ研究では、筆者が独自に作成した質問紙を用いて調査を実施し、前期調査の結果で因子分析を行い、変化調査では因子に基づいて変化を明らかにした。

以上の、4分野の研究によって、従来の研究では明確にされなかった初級韓国語学習者の総合的な学習態度の特徴と変化について明らかにすることができたと思われる。ここでは、

各分野の研究結果を、前期調査、前後期比較、変化調査の順に言及する。さらに、成績の違いによる特徴についても述べる。

第一に、前期調査から、初級韓国語学習者が韓国語の学習に対して積極的で前向きであり、学習を楽しんでいることや、韓国語の習得に対して自信があること等が明らかになった。また、この結果を英語学習と比較した結果、英語よりも韓国語に対する好意や学習意欲の方が強いことが示唆された。これは、自ら韓国語を学ぶことを選択したことや、ハングル文字の新鮮さから、学習動機が高められているためではないかと考える。しかし、使用されている学習ストラテジーは多くないことから、学習方法はまだ確立されていないと思われる。

第二に、前後期比較から、学習経験を重ねることによって、韓国語は易しいと考えるようになり、韓国語で話すことに対する不安が軽減され、使用する学習ストラテジーも増え、韓国語学習に慣れ親しんできたことが明らかにされた。しかし、前期に比べ、学習に対する前向きさや楽観的な態度が薄れてきていることも示唆された。これは、前期に学習者が感じていた韓国語に対する新鮮さが薄れ、さらに、学習内容が増えたことにより、前期のように楽観的ではいられなくなったためではないかと思われる。しかし、前期にはあまり使用されなかった読み書きに用いる学習ストラテジーを使用するようになったり、前期よりも音楽やドラマへの関心が高くなったりと、学習に対する態度は概ね肯定的であるといえる。

第三に、変化調査から、学習者自身が認知している変化が明らかになったが、前後期比較の結果とは異なり、学習者自身はポジティブな変化のみを認知していることがわかった。このことから、学習者自身は、前後期比較で明らかになったやる気や楽観性の減退を感じておらず、前期以上に、積極的に前向きに学習に臨んでおり、ストラテジーも多様化され、韓国、韓国語、韓国人に対するイメージも一層肯定的になったと認知していることが明らかにされた。これは、学習者が前期にあまり意識していなかった学習態度が後期になり弱化しても、その変化を認知しづらいという傾向があるためであると考えられる。しかし、後期になり、学習者が前期以上に学習を前向きに楽しんでいる、と自身の変化を認知していることは韓国語学習に対して良い影響を与えていると思われる。

第四に成績による分析の結果、下位群に比べ、上位群は学習に対する意欲や韓国文化への関心が強いこと、復習をよくすること、使用ストラテジーが多いこと等が示唆された。そして、上昇群と下降群の変化を比較した結果、前期よりも後期の方が、下降群の学習意欲の下がり方が大きく、さらに復習をしなくなったこと等が明らかにされた。これらの結果から成績により学習態度やその変化の傾向が異なることがわかった。

以上の結果から、本論文の目的である、初級韓国語学習者の学習態度の特徴と、従来の韓国語学習者を対象とした研究では明らかにされてこなかった学習経験による学習態度の変化について総合的に明らかにすることができたと思われる。特に、変化については、学習経験による変化を「変化調査」と「前後期比較」の2つの方法によって分析したことに

より、従来の研究ではなされなかった学習者が認知している変化と実際の変化の違いを明確にすることができた。さらに、学習動機の変化について、Dörnyei (2011) は、「L2 教室における学習動機づけのプロセス・モデル」(Dörnyei & Ottó, 1998) の、学習を行う段階である「行動段階」で、学習者自身や教師が、学習動機づけを積極的に、育み、保護しなければ、学習開始時にもっていた学習動機が消滅してしまうとしているが、本論文の変化の研究の結果、肯定的な変化が明らかにされたことから、大学で第二外国語として初級韓国語を学んでいる学習者は、学習経験によって、動機づけを育み、保護することに成功していることが示唆された。これらの成果は微力ながら韓国語や他の外国語教育の分野に貢献できるのではないかと考える。

しかし、本研究では、学習態度変容を引き起こす要因や、実際の変化と学習者の認知している変化が異なる根本的な原因については明らかに出来なかった。これらの研究については今後の課題としていきたいと考えている。